

報徳の二字あり、又願文中北魏高祖孝文帝の時報徳寺建立の次第を敘する所より見るも、もと報徳寺に置かれたものであらう。

武定三季歳在乙丑の下月次を示す二字を缺いて居るが丁丑朔とあるによつて九月である事が知られる。即ち東魏始祖孝靜帝武定三年九月十五日の造顯である。然るに陶齋藏石記卷九を見るに通鑑目錄によつて丁丑は七月であると記して居る。然しながら通鑑目錄卷十五に見るも武定三年は「正庚辰四巳酉六戊申八丁未十丙午十一乙巳朔」とあつて丁丑は當然九月に當り七月とせるは陶齋藏石記の誤である。因みに大村西崖著支那美術史彫塑篇にはこの碑文を載せ丁丑を四月と記す。然し三正綜覽によるも武定三年丁丑朔の月は九月である。

餘談に互るが陶齋藏石記には梁の中大通六年十月東魏が司州を改めて洛州となし尙書令元弼を以て洛州刺史とし、翌大同元年五月元慶和兵を引いて東魏南兗州に逼るや時の洛州刺史韓賢之を拒んで戦ふ。この碑なる武定三年は梁の大同元年に當り、碑文に洛州刺史田景の名を見るは即ちこの年五月洛州刺史韓賢行にあり、田景かわつて七月洛州刺史となつたものであらうと記して居る。併し武定三年西紀五
四五年は大同元年西紀五
三五年より後、事十年にしてこの藏石記の記事又誤である。

この碑兩側には各五行に建碑に關與せる師僧沙門並びに時の文武官の名を列ね、その中に見ゆる佛寺の中例へば追聖、景明等の諸寺は洛陽伽藍記にも載する所のもの、報徳寺この建碑に當つて附近の寺僧等共に關與せる事情を知る事が出来る。(尾高)

二、毘沙門天像

京都 橋本關一氏藏

木造 像高一・〇一五米

(丸尾彰三郎「橋本關雪氏藏毘沙門天像に就いて」参照)

三、鬘懸地藏緣起繪殘缺

京都 六波羅蜜寺藏

掛幅装 紙本着色、豎二九・七釐 横四五・二釐

本圖、寺傳に依れば鬘懸地藏緣起繪殘缺と稱してゐる。鬘懸地藏緣起なる繪卷に就いては、現時知らるる範圍に於て他に傳存するものを見ず、僅に此の斷片を傳へて居るに過ぎないが爲めに明に知る由も無いが、本圖裏面に左の識語がある。

此繪傳由致者慶雲事書云、六波羅密寺之地藏尊其本願者鎮守府將軍兼陸奥守藤原秀衡公念持尊也、將軍在京洛日、或夜夢地藏菩薩乘紫雲降臨秀衡枕許告曰、我殊導引女人也、汝與母俱每結緣我故爲示形告了云、公合掌敬禮而夢覺、猶不思議哉曉天得同尊容圓滿殊勝地藏尊一軸、歡喜踴躍之餘、黃金三千兩與洛陽佛工白河法眼、彼菩薩三箇年而令造立、像成之日、地藏大士從空降臨而開眼新佛、還歸於空、願主彌隨喜、如何而可奉具於本□□與我□步給致祈誓處、無左右步下給、檀越深敬信而奉安置於淨處、爰節序押移、檀越卒後、佛閣破而月挑一點灯明、僧徒荒唱風三昧梵音、哀哉堂宇之終成一塚、于時與世國司這巡具而到此處、有種々靈驗、即令集群民、□此緣得今地藏尊、聽安置國廳、其後奇瑞不可勝算、然國司京上之時、隨跡同上□到國司私□彌崇敬無類□告曰、可遷空也上人之觀音堂、度々見給、依任夢告國司供養而自奉遷彼堂中、利益衆生之方便日新而貧賤富榮定業能轉類不知幾千萬、依之道俗男女歸依渴仰矣、此繪傳畫者、依靈夢所圖土佐光信也、由來者青蓮院宮御筆也、記由來如此而已、及破壞加修補、勘讀件事書、校合一本、傳記寫以貽後來因記地藏尊遷當堂給後、有給後有洛東貧女其母命終悲歎無□、行脚僧到而背負孝養葬給、爲其御布施、娘自地髮奉之隨喜給問云、御僧何在乎、住於六波羅堂之内、言了去、件女參詣地藏尊左御手持件髮、感喜敬禮發心而爲尼、終遂往生云々、故以稱女人成佛導引鬘掛地藏尊、可信可仰而已

文化十三年庚寅初春補陀落山中葉五十四世憲壽修補之時錄之

と。是れに依つて、略、鬘懸地藏の名の來由を知ることが出来る。而して現時同寺食堂に奉安せる藤末鎌初の作と思はる、地藏菩薩立像は、右に柄香爐を持ち、左に毛髮を持つ尊像で、俗に鬘懸の地藏と稱し、此の識語の内容と一致するものと考へ得る。然し當寺地藏像或は地藏堂に關する古記類、即ち今昔物語、

地藏菩薩靈驗記、山槐記、百練抄、明月記等には一も該傳説に及べるものなく、殊に貞治二年沙門觀賞撰述の六波羅蜜寺勸進帳の如き、本圖識語の前半の典據と考へらるるにも拘らず、遂に鬘懸傳説に及んで居ない。のみならず康頼寶物集には本寺地藏像に關して、却つて異曲同工の土おくり傳説があり正しく本傳説の藍本であらうと解せられる。而して此の傳説の構成に一種の近世的色彩の濃厚なると、出來齋京土產以下の近世の案内記に此の傳説を散見することの多い事實は、此の傳説の起源がたとひ徳川期に入つて後のものでないとしても、さ程遠くは上らないものかと思はれる。随つて食堂安置の地藏像の如きも無論當初より毛髪を手にした像でなく、後世、此の傳説に附會せるものか、或は逆に、有り得べき偶然の習俗から鬘懸傳説の發生を見たものでないかと思はれる。それが特に女人導引の思想に對して、土おくり傳説よりも一層切實なるものあるは、また此の傳説の發展をより多く合理的に解釋し得るであらう。

こゝに掲ぐる鬘懸地藏緣起は現時僅にこの一斷片を傳存するのみにして、其の詞書の如きも影本面に見らるゝ三行餘を遺すに過ぎないが爲めに、殆んど其の傳稱の當否を想定し難いが、斯幅識語に依るも、此の一段に就きて云はゞ、少くも鬘懸地藏傳説の繪であることは信じ難く、寧ろ六波羅蜜寺地藏緣起或は地藏堂緣起とも云ふべき繪卷の一殘缺と見るべきであらう。

今、仔細に其の圖樣畫致を觀るに、圖を構ふること簡素にして、筆を行ふことまた頗る輕淡、加ふるに賦彩の如きも、概ね雅醇の體を留めて僅に地藏の圓、光と梅花とに淡朱を、人物の服飾に部分的な白綠等を加へてゐるに過ぎない。また圖上の霞引の如きも鎌末以後の諸作に見る重鬱な表現法に據らずして専ら簡素なる手法を賞用し、全畫面に一種の愛すべき稚氣を横溢せしめてゐる。無論其の半面には本圖が既に足利中期以後の多數のお伽草紙の作品に漸く近づきつゝあることを示してゐるものがあるが、而も此の簡素なる手法のうちには尙一味の古致を留めてゐる。また本圖詞書の書風より見るも一面には既に御家流の胚胎をも感ぜらるゝにも拘らず、尙古様を傳へてゐると一致してゐる。寺傳に依れば、本圖は土佐光信の作と稱されてゐるが、所謂光信或は光信一派と想

像し得べき諸作に比して、畫致畫品の頗る遠きものあり、要するに附會の説なことは云ふまでもないであらう。のみならず、本圖が一面に見るが如き女性的な纖弱な畫致に墮しながらも、尙、頼焼阿彌陀緣起繪の如き樸實な流風を傳へて居るものとして、恐らく南北朝以後足利中期に至るまでに繪かれた一作品であらうと想像せしめる。無論鎌倉盛期の緣起繪卷に比しては劣ること萬々なるも、また一種の畫蹟とすべきであらう。

由來足利期は地藏信仰の都鄙に弘通した時代で、將軍義政の如きも其の信仰特に厚かりしこと蔭涼軒日録にも見え、其の他初世以來地藏像造立に關する記録は非常に多いから、本圖が鬘懸地藏傳説を取扱へる一斷片なると否とは第二として、此の種の作品の當代に繪かれたことも亦偶然ではない。(田中)

四、因陀羅筆 丹霞燒佛圖

侯爵 黒田長成氏藏

紙本墨畫 掛幅 竪三五厘 横三七厘

畫全體が淡墨仕立てで、その單調を破る濃墨として或は補景の樹木中に點苔かと見えるほどの雜樹などがあり、人物も著衣のそここゝ(襟、袖のへり、紐など)殊には面部に於ける眼鼻口耳等の備へ、手に握りたる杖などにをかしう焦墨を加へて、さなくば如何にぬむかるべき淡墨の畫面を起きよゝと揺り覺まし、更に衣は梁楷の減筆に適宜の圓みと柔みとを加へた折蘆の自在なる一變體、頭顱と件の眼鼻口とは、或は杖握り或は火にかざす手と共に癡とも覺ゆる滲み(ニジ)がちの戰筆描を用ひて、輪廓足らざるが如くまた餘るが如く、且つ禿げ残りたる頭後の髪と口邊の髯とは常に有るか無きかに渴擦を以て加ふことを忘れず、樹法に至りては昔人の謂ゆる飛白、篆籀といふも斯くやと思はれて、法と名づくるには少しく當らざるかと危まるゝほど奇に、若し夫れこゝぞ其畫の筆の擱きどころと思はるゝ樹幹の先端に及べば、はや硯の水は切れたり、墨の命もこれまでと見ゆるを、唾もて漸くに濕しつゝ、さゝくれたる筆の腹を暴氣に臥せ著けて、下より逆に揉み上げ、また上よりこすり下ろして、それでも畫きたい程のことは畫けたとて、畫中の人物と共に大口開きて呵々と笑ひけむ。この用